

## 令和5年度第1回就労部会 会議録

日時 令和5年8月17日(木) 午後2時～4時  
場所 東久留米市役所705会議室  
出席者 河野部会長、高原副部会長、小田部委員、吉野委員、栗城委員、本橋氏・障子田氏(渡辺委員の代理)、小畑委員、時田委員  
事務局 内藤係長  
欠席者 石渡委員

## 1. 自己紹介と各施設の課題

(河野) さいわい福祉センターの就労移行は6月に就職が決まり利用者が0人になってしまった。新規の利用者が募集をしても入らない状況。

(高原) くるめパソコン作業所の就労移行も数人しかいない。作業所の月平均工賃は、5千円から1万円の間となっている。

(本橋、障子田) 就労支援室は180人登録がある、前年度は10名の登録者が離職となった。再就職支援、就職準備支援に繋げた。60歳(定年退職)しても再就職したいニーズがある

(小畑) 35名の利用登録(作業所)がある。コロナ等の影響で、月平均工賃は一昨年の2万5千円から昨年の1万8千円に下がった。週1～2回通所の方もいる。月1回でも1人にカウントされる。

(小田部) 職能開発科、定員は1学年40名だが、3年生の実人員は37名。就職を目指している20名が一社応募を決めている(?)。東久留米市在住(生徒)はゼロ人。普通課42名は3人中1名が求人票を用意できている。年に10日、卒業生が学校に来られる日を作って、暑い日の過ごし方等の学習の場をもうけている。

(栗城) 来年から精神障害者、重度障害者の所定労働時間10以上～20時間未満も雇用率にカウントされる。超短時間での就労と、B型を利用しながら働くことができるようになる。休職中にB型、移行の利用ができるようになる。B型からの就労は加算がつく等、ここを促していこうと国は思っているらしい。発達障害のスクリーニングが低年齢化している。高校でのひきこもり、児童支援との連携が模索されている。蒼空で全員支援するのは難しい。入り口が広がっていく中で、生活課題のある人は多い(福祉事務所の管轄)。

(時田) 生活訓練事業所(3年間)、卒業後、10時間以内の雇用が続いている。若い人が増えている。10代が4～5人、10代と20代が半分。働く中で失敗体験を持っている人が多いので、無理をしない。しかし若い人、不登校の人には元手になる体験が無い。卒業先、週二回だったら人の中に行って良い。B型に行くと工賃を下げる人たち。部会のテーマとしては、制度の隙間を埋め合っていくようなもの良いのでは。

○ ○ ○

## 2. 意見交換

(河野) それでは、もう少し聞いてみたい所を出して下さい。

(小田部) 就労アセスメントの導入が言われている。相談支援事業所が付いている人といない人がいる。

(栗城) 居場所がありつつ働くことが大切。「なかぼつ?・センター?」ですきまの話では定年退職した高齢障害者の就労ニーズがある。

(高原) 作業所から就労して一年ぐらい続いたけれど体と心が持たず退職となった精神障害の方がおられる。退職したので、作業所に通いたいと思い、とりあえず生活保護の申請書を書いて出したら、係りの方から、そんなに申請書がしっかり書けるのであれば、作業所ではなく一般就労をしてください、と言われた。統合失調症の方ですが、結構重い方なのにさらに具合が悪くならないか心配をしている。

(栗城) そういう場合は、作業所のスタッフが通院同行をして主治医に相談すべきです。

(時田) 特別支援学校を卒業すると放ディが使えなくなる。

(内藤) 18歳になると放ディが使えない問題があることは知っているが、財源の問題もあるので、困っているからすぐに何とかとはいえない。

(栗城) 発達、精神の方は、放ディではなく、在宅になってしまう。

(小畑) 情緒の人は放ディが難しい。兄弟でも片方が子家センとの関わりがある例が多い。手帳を取る気もないと家庭内で抱えてしまう。子家センでは訪看を入れたのみ、サービスには自力で繋がれない。

(時田) 早く繋がる先を作ることは大切。シングルの人は支援を使う力が弱い。心の隙間をうめることが大切。

(小田部) 特支に通う子の数は減っている。少子高齢化、中学校までの不登校の人がどうなっているかは教育委員会しかわからない。都立と市の教委とは組織が違う。学校を選べるようになった。エンカレッジ、チャレンジ、通信だが、それらの学校の選択の仕方を学ぶ機会が少ない。80/50問題は部会をまたいで議論できると良い。

(河野) 居場所作りになると、住みよいまちづくり部会にもかかわってくるのではないかな。

(小田部) 本人が不登校で、その親も昔不登校だったケースがある。何とかなっていて今日まで至るので、困り感がこちらの感覚と違う。そこまではあっておいて、死ぬかもしれない状況になってはじめて相談に来られた方もあった。

(栗城) 20代で仕事を辞めて30年引き籠っていますという方がおられた。父が癌になって、いよいよピンチになった時、今から働きましょうといっても無理、地活も無理。

(障子田) さいわいでも同じ、親が80になってから働きたい、娘は家でピアノを弾いていました。50代の方で、働きたいとは言っても、直ぐには難しいので、まずはB型通所をすすめた。

(栗城) うちの息子はただのうつ病なので、治るまで見なければいけないと言われる親御さんもいる。

(治るのを待つと年を取ってしまう)

(高原) 困っているとされない人の支援は難しい、こうして欲しいと言われると支援できるのだが。

(時田) 働きたいと言われる人が多い。

(小田部) 東久留米市では基相がないので、困った事例集がない。就労部会、相談支援部会などで作れると良いのだが。今すぐ困ったケースを何とかできるわけではないが。あるいは、就労アセスメントを企業の方や商工会に入ってもらって部会をやる手もある。

(河野) 小平は作業者から就労ヘシステマチックに出来ているので話しをきいてみる手もある。就労支援センターほっとの中村さんに小平市の取り組みも参考にしてみようか。

(栗城) 小平ではステップアップBがある。

(小田部) 小平はあさやけから作ってきている。空きのサービス調整会議などの施設同士の連絡会での情報交換をやっている所もある。

(時田) 本人の働きたいという思いを実現していく支援が、就労支援部会の目的だと思う。

最後に次回の日程を話し合う中、小田部さんの東久留米特支の見学について話し合い、関係機関とのネットワークづくりや情報交換を目的に市内の作業所に声をかけ見学に行くということになった。